

自然農, その限界とこれからの方向性

小原裕子・秋山邦裕[†]

(農業経営学研究室)

平成25年9月30日 受理

要 約

現在, 日本の農業は大きな曲がり角に立っている。加盟したばかりのTPPや, 現時点では暗礁に乗り上げているWTOだが, いずれ締結されれば安い外国の農産物が天津波のように押し寄せるだろうし, 半世紀以上にわたって行われてきた化学肥料・農薬の大量使用の慣行農業のため, 農地は疲れ切っている。また, ここ数年, 食をめぐる不祥事も相次いだ。

そうした中, 消費者の「安心・安全」な農産物への志向が大きな流れとなり, 自ら家庭菜園や市民農園, 又は遊休農地を借り受けるなどして「小さな農」を始める人たちが増えている。

そのような人たちのため, 自然農法の一つ, 川口由一氏の提唱する「自然農」を学び, 実践しようとしている人たちが集う自然農塾の調査を中心に行い, それを通して, 自然農での農的生活の実態に迫り, その問題点を探った。その問題点をふまえた上で, 自然農による農的生活が成り立つような方向性を考察した。

キーワード: 小さな農, 自然農, 農的暮らし, 半農半X

1. はじめに

(1) 研究の背景

第2次世界大戦後開発された化学肥料や化学農薬が大量に投入された我が国の農業は, 確かに食料増産という第一義的目的は果たされ, コメに関してはすでに1970年代始めには生産過剰におちいるほどになった。

しかしその反面, 大量の化学物質により, 地力が衰え, 土壌だけではなく, 河川や海にまで汚染が広がってしまった。それにより, ここ半世紀で生態系にも深刻な影響を与えている。そればかりか, 肝心の農作物にも化学的残留物質が検出され, 人体への健康被害も多々出ている。

このような事態をいち早く予見し, 自然の摂理に従った農法を提唱し実践した岡田茂吉や福岡正信, 川口由一らの自然農法に学び, その農法で家庭菜園を営む人たちが生業として就農する人がいる。

確かに「食」に関しては, 質より量の時代はとっくに過ぎ去り, 消費者は今や安心・安全, 本物志向など, 食へのこだわりが強くなってきている。その食へのこだわりから地球環境へと関心が広がり, いかなる時代にも持続可能で, かつ環境保全型農業の最たるものとしての自然農法が静かなブームとなっている。

(2) 本研究の目的

一口に自然農法といってもたくさんの農法がありそれぞれに実践者もいるが, 本研究では川口由一の「自然農」を取り上げた。それは全国に「自然農塾」を約30カ所展開し

ていて塾生が多いこと, 川口由一が現役の実践者であること, 近年刊行される書物が多いこと, そうしてその農法がとてもしも簡単なことなどの理由からだ。

この自然農ではたして農的生活が維持できるのか? もしくは専業農家として営農できるのか? なるべく多くの事例を当たり, その問題点を探り, それをふまえた上で, より発展的な方向の可能性を探る。

(3) 本研究の方法

研究の方法として次の4つを挙げる。

1) 福岡自然農塾に自ら一年間参加し, 自然農を実体験する。

2010年度の福岡自然農塾の年間計画に則り, 自ら参加し, 積極的に自然農の田畑で学ぶ。作物の育ちの様子や収穫の程度, 品質などをつぶさに観察しながら自然農のハウツーを学ぶ。

2) 参加者と交流する。

参加者は広島から鹿児島まで, 毎回100人近くへのほる。ほとんどは家庭菜園, 市民農園などの自給的営農を目指す人たちだが, その中の5~6人は生業としての就農を目指している。いずれの人たちとも積極的に交流し, その人たちの生の声から農的生活の実態に迫る。

3) 全国の自然農塾にアンケート調査をする。

川口由一の提唱する「自然農」は氏の住む奈良市周辺, つまり近畿地方に実践者および学びの場所としての農塾が多かった。しかし, 2008年発刊された新井由己著「自然農に生きる人たち」(有)自然食通信社刊の巻末の資料によると, 今や25都道府県にわたり約30の農塾が展開され

[†]: 連絡責任者: 秋山邦裕 (生物生産学科農業経営学研究室)

Tel: 099-285-8623, E-mail: akiyama@agri.kagoshima-u.ac.jp

ている。これらの自然農塾に対して研修生の受け入れ状況、またその後の研修生の進路、就農の割合、離農の割合、離農の理由などを尋ねるアンケートを実施し、全国的な動向を知る。

4) 鹿児島市周辺で自然農を実践している2人の事例を調べる。

市来串木野市のUさん、鹿児島市のHさんの2人の対照的な事例から、自然農による農的生活の実情と問題点から今後の方向性を探る。

2. 農的暮らしに向かう人々

(1) マスメディアに見る流れ

本屋に立ち寄って月刊誌を見ると、トレンドが一目瞭然に分かる。ファッション、グルメ、健康法、音楽、人気タレント等々、色取りあざやかな数々の出版物で店頭は飾られる。

そうした中、ここ数年目につくのが「農業」に関する出版物だ。家の光協会出版の臨月刊「やさしい畑」、学研パブリッシング出版の季刊「野菜だより」、日本放送出版協会の「やさしいの時間」などが売れ筋のようだが、共通する言葉は「野菜」である。

テレビでは、NHK教育チャンネルで2008年から日曜日の朝8時に放映される「やさしいの時間」が静かなブームをよんでいる。これは、家庭菜園を手掛ける人たち向けの番組で、農業大学の専門家が、かつてのアイドル歌手で今や良き家庭人になっているタレントを相手に、懇切丁寧に野菜づくりを教えるという番組だ。平地の家庭菜園を持てる視聴者だけではなく、集合住宅に住まう人たち向けにベランダでのプランター栽培も解説される。土作りから植え付け、施肥、土寄せ、害虫退治などの手の掛け方、そして収穫までを実験農園で実地説明し、最後は収穫した野菜の料理まで紹介する。

季刊誌「チルチンびと」「住む」「自休自足」など、若い世代から中高年にまで幅広い読者を持つこれらの雑誌は、千円前後の手ごろな価格でカラー写真もふんだんに掲載され、まさに癒し系の読み物となっていて、かつての賢い家計のやりくり術や家事のハウツー紹介の婦人雑誌や芸能界の情報紙、ファッション情報紙とは趣を異にしている。ページをめくってみると、住まいのしつらえから、食べ物、着るもの、子育て、余暇のすごしかたまで、合言葉は「ナチュラルライフ」と「スローライフ」そして「農的生活」だ。

しかし、これらの出版物をめくってみると、彼らが目指すものは何ヘクタールもの土地を耕す大規模農業ではなく、自分たちが自給自足できる広さ、安心・安全な農産物をまかなう程度の「ちいさな農」であることが窺える。また「農」を、肉体労働の多い苦しく採算の合わない産業として捉えずに、身近に自然を体感でき、命に直結する「食べ物」を生産するというきわめて人間らしい営みと捉えている。その中でも、農をむしろある種の健全なレジャーと考え、野良着姿もファッションブルな「農ギャル」なる若い女性たちの出現も話題をさそった。

このように、本屋の店頭を眺めると、農に吹く新しい風、爽やかな風を感じて、これからの日本の農業に何かしらの可能性を予感させてくれる。

(2) 団塊の世代の定年帰農

戦後の貧しさから必死に立ち直り、驚異的な経済成長を遂げ、今や成熟社会に移った日本だが、振り返ると経済的豊かさ引き換えに多くのものを置き去りにし、失ってしまった。

今、「本当の豊かさ」とは何か・・・と多くの人たちが考え始めている。とりわけ、「モーレツ社員」として「企業戦士」として、家庭も地域社会も顧みず、残業、残業で「カローシ」寸前まで働き詰めだった団塊の世代。その世代の一員として大都会で働いた後、生まれ故郷に戻りまたは農村に移り住み、新たに農業を始める人もいる。農業人口の半数が65歳以上の人たちが占めている農村では、定年帰農者はまだバリバリの現役農業従事者と言える。

また、平均寿命が男性約80才、女性約85才まで伸びた現在、定年後の長い老後をどのように生き生きと過ごすかが大きな問題となっている。加えて、国家財政のひっ迫により、年々実質目減りする年金に対する経済的不安も増している。このような経済的不安感から、できるだけ食料を自給自足しようと考えるのは当然だろう。加えて、食に対する安心・安全の意識が高まり、自らの手で食を賄うという極めて人間的、根源的な労働、つまり農業に志向する人たちが多くなってきている。

(3) 若者たちの新たな動き

若者を取り巻く現状は決して甘くはない。特に就職氷河期といわれる今、職にあふれ、非正規雇用で甘んじてアルバイトで食いつないでいく若者も珍しくはない。このように非正規雇用で働いても、自活するには十分な収入もなく、成人しても親もとで暮らさざるを得ない若者が増え、「ニート」と呼ばれてひとつの社会現象になっている。

こうした若者たちが容易に結婚生活に入れるわけもなく、日本の既婚率は衰退の一途をたどっている。もちろん就職の問題だけが既婚率の低下の原因ではなからうが、大きな要因の一つであることは否めない。正規雇用で働いている場合でも事態は深刻だ。戦後、急激な経済発展を遂げた日本だがその陰には競争と効率第一主義、利益追求の価値観に支配され、「企業戦士」として必死に働く親の後ろ姿があった。それを見ながら自らは「受験戦士」として頑張ってきた子ども世代が、いざ社会に出ていく段になったとき、すでに終身雇用制度、年功序列制度は崩れ、実力第一主義、実績第一主義の厳しいシステムが待ち受けていた。うかうかしては、いつ解雇されるか分からない不安感でますます追いつめられる若者が多くなっている。もちろん、若者だけではなく、長引く不況の中、中高年でも会社の業績不振や倒産により職を失う人が多い現状で、そうした人たちの再就職はとてつもなく困難になってきている。このように、だんだん社会不安が増す中、若者たちの中にもっと人間らしい生活、地に足の着いた生活、自然に囲まれた生活として

の「農的生活」への関心が高まってきている。

しかし農を取り巻く現実には厳しいものがある。一般的には、農家の収入はサラリーマンの平均収入の3分の1程度とみられている。どこを向いても農業だけではとても暮らしていけない現実が横たわっている。

それでもなお、いきすぎた物質文明に疑問を持ち、生活の在り方全般を見直し、手作りできるものはなるべく作り、慎ましく自給自足の生活を選ぶ人たちもいる。しかしその生活は決して楽ではない。資本主義経済、貨幣経済の日本ではどんな田舎に住まおうと、いくばくかのお金はどうしても必要だ。公共料金、(電気、ガス、水道)国民健康保険税、国民年金、固定資産税、住民税、電話代、ガソリン代、あるいは子どものいる家庭では教育費もかさんでくる。単に食べ物を自給するだけでは生活は成り立たない現実が厳然としてそこにある。「農的暮らし」に憧れて、ナチュラルライフ、スローライフを夢見て就農しても、農業だけでは食べていけない厳しい現実がある。

しかし今、若者を中心に「半農半X」という概念が広まっている。これは2007年に(株)遊タイム出版から刊行された塩見直紀著「半農半Xな人生の歩き方88」という本が投げかけた21世紀を生き抜くための新しい概念だ。

半農とは持続可能な農を中心にした慎ましい暮らし、半Xとはそれぞれの天職を生かした社会貢献という意味で、それまでの単なる「兼業農家」という言葉とは少し違った意味合いがある。それぞれが「半農半X」な生活を送りながら、連帯しあい、共に持続可能な社会を旨として生きるという新しい文化の創造に繋がる概念だ。

確かに20世紀は「競争の世紀」と言われた。凄まじい経済成長に伴う世界的競争により、2度にわたり世界大戦を引き起こし、多くの犠牲を払い、苦い教訓を味わった。今現在、21世紀に生きる人類は目の前に困難な課題をいくつも突き付けられている。今や、競争している場合ではない、共に手を取り合い、知恵を出し合って何とかこの危機を乗り越えなければ人類の未来はない、というところまで追い詰められている。21世紀はそういう意味で「共生の世紀」と言われる。

こうした若い世代が、農的暮らしを基本にした「半農半X」な生き方を広げていき、本当の共生の輪が広がれば、物質的には慎ましくても、精神的には豊かなスローライフ、ナチュラルライフが実現できるだろう。

3. いろいろな自然農法

「農的生活に向かう人々」たちの目的のひとつは、安心・安全な作物を手にする事なので、大多数の人たちの農法は有機農法、または自然農法だ。この二つの農法の共通点は化学的な肥料、化学的な農薬を使わないことだが、決定的な違いは判然としない。もちろん、それぞれに亜流があり、有機農法の長所、自然農法の長所をうまく組み合わせる独自の農法を確立している人たちが多く、その区別ははっきりしない場合が多い。たとえば後述するMOA自然農法は自然農法の代表格になっており、実践者も全国に多く存

在しているし全国規模の流通のネットワークを持つ巨大組織だ。その農法の手引書「MOA自然農法ガイドライン」を読むと、彼らは耕起しそのための機械も使っている。決して無肥料ではなく、「自然堆肥」とよばれる堆肥もすき込む。場合によってはビニールハウスやトンネル栽培も良しとしている。これを読む限り、自然農法というよりはむしろ有機農法に近いのでは・・・と思われる。しかし、草に関しては「草生栽培」を奨励し草の有益性を説いているという具合だ。

土を耕すという重労働に費やす時間と労力、農業機械のコストの面から考えると、「小さな農」をめざす場合、ここに大きな選択のポイントがある。耕すという労働がなくなれば農作業の半分が軽減できるということだ。不耕起でやるとなると耕すための機械も不必要になる。

次に、もし有機農法と自然農法の違いは何かと問われると、除草するかしないかの点である。草は作物の敵、徹底して草取りし、田畑には草一本生やささないことが「上農」のめやすとされ、これまで農家は「草との戦い」に追われてきた。しかし、近年、草の持つ働きが見直され、特に草の根が土中の微生物を涵養し、水分を適切に保持し、その毛根が土に深くもぐり、いわば土を耕作して団粒構造にしてくれることが分かってきた。この草の根の働きで地力がつき、従ってことさら肥料をいれなくても作物は十分に育つという、このような草の力を借りて作物を作るのが自然農法の特徴となっている。

また肥料の問題も大きなポイントとなる。有機農業においては、有機肥料の出来具合で作物の収量が左右される。この肥料作りの技術とそれを繰り返す労力が大きな比重を占める。

こうして見てくると、耕すための機械(トラクター、管理機)も必要ではなく、それらを動かすための化石燃料も必要とせず、肥料も農薬も用いずすみ、どんな時代が訪れても続けられる「持続可能な農法」に多くの人たちの関心が向かうのは自然の成り行きと言えよう。

かえりみると自然農法の歴史は70年以上の歴史があり、この間、いろいろな自然農法が提唱されてきた。おおまかな流れを追ってみよう。

(1) 岡田茂吉(1882~1955年)の提唱する自然農法

1935年、世界救世教の創始者の岡田茂吉氏は「土を尊び、土を愛する」ことが何よりも大切で、そのため人為肥料のごとき不純物を入れずに土を清浄に保つよう、「無肥料」「無農薬」の自然農法を提唱した。また、太陽からの火素エネルギー、月からの水素エネルギー、地球からの土素エネルギーの3つのエネルギーが合わさると霊気となり、その霊気により作物は正常に生育できると説いた。これを受けて昭和28年、(1953年)自然農法普及会が発足し各地に支部を結成していく。ちょうどこの頃、後述する福岡正信が自然農法を唱えだし、「化学的、人為的ものの排除」という共通点は認めつつ、福岡正信の自然農法と区別するため、Mokichi Okada Associationの頭文字を取って、MOA自然農法と名乗るようになった。

(2) 福岡正信の自然農法とそれに続く川口由一の「自然農」
まず、二人の経歴を簡単に述べる。

福岡正信（1913年～2008年）

農業試験場の研究員として研究を続けるうち、科学の限界を悟り、1947年より郷里の愛媛県に帰り、生家の農業を受け継ぐ。「不耕起」「無肥料」「無農薬」「無除草」の原則で、種まきと収穫以外、人間の関与をなるべく排除し、ほとんど自然に任せる究極の自然農法を提唱した。著書も多数残したが、代表作「自然農法 わら一本の革命」では米麦連続不耕起直播の技術を紹介すると共に、自然や人間に対する深遠な哲学も述べられ、多くの人に影響を与えた。この「自然農法 わら一本の革命」は20カ国語以上に翻訳され世界的なベストセラーになり、1988年フィリッピンのマグサイサイ賞を受けた。

川口由一（1939年～ ）

奈良県で中学卒業と同時に生家の農業を受け継ぎ、化学肥料・化学農薬まみれで体を壊し、慣行農業に疑問を持つ。福岡正信の自然農法に強い影響を受け、1978年から模索しつつ「自然農」を確立した。耕さず、肥料・農薬を用いず、草や虫を敵としないという原則で、「赤目自然農塾」（三重県名張市）を中心に各地で農塾を展開し、分かりやすいシンプルな技術の普及活動を続けている。

川口由一は、1970年代の中ごろ、作家有吉佐和子の「複合汚染」を読み、それまで自分がやっていた慣行農法の恐ろしさに気づき、自分自身の原因不明の体調の悪さの原因が、当時大量に使われていたホリドールなどの劇薬のせいと気づいた。ちょうどそのころ、福岡正信の「自然農法 わら一本の革命」が出版され、新しい農法を模索中だった彼は夢中でそれを読んでさっそく自分の田畑で試してみる。

まず、福岡が唱える水稲の直播きを試したが、2年続けてもほとんど収穫できない。そこで、自分なりの工夫で、春の乾田に苗代を作り、そこに種もみを播き、約2か月育てた苗を不耕起の田んぼに一本ずつ手植えする方法をやってみたところ、満足できる収穫が得られた。

この経験をもとに川口は、福岡正信の唱える自然農法の原理原則はそのまま認めつつも、作物は放任ではうまく育たず、適切な時期に適切な施肥が必要だという結論に至った。

その後、農民として様々な作物の栽培実践者として経験を積み、自らの農法を「自然農」と名付け、赤目自然農塾を中心にその農法を広めていった。

その農法はとてもシンプルでローコストだ。まず、畝を作ったらそれはそのまま半永久的に使う。土地は不耕起、肥料は施さない、草は抜かずに適時に鎌で刈り、刈った草はそこに草マルチとして敷いて置く。農薬は用いず、ビニール類は用いず、原則として種は自家採種するという農法だ。

機械も使わず、耕さず、肥料も不必要(注)、草抜きも農薬も不要の農法、老若男女の区別なく鎌一本だけでやれる農法として広がりを見せ、現在、全国に30あまりの自然農

塾がある。

<もろもろの自然農法>

自然栽培：著書「奇跡のリンゴ」で有名になった木村秋則の無肥料・無農薬の農法

天然農法：藤井平司（1924～2002）伝統的栽培の方法を研究するうちたどりついた、無農薬、無化学肥料の栽培方法。

循環農法：赤峰勝人（1943～）「すべてのものは循環している」という独自の哲学で無農薬・無化学肥料の農法を展開。

外国では、土着菌と天恵緑汁を使った韓国式自然農法、西洋では19世紀にルドルフ・シュタイナーが提唱したバイオダイナミック農法、オーストラリアではパーマカルチャー、北欧フィンランドのルオムとよばれる農法など、世界各地にそれぞれの風土に合った自然農法がある。

4. 自然農を学ぶところ

(1) 全国の自然農塾

第2章で述べた川口由一の提唱する「自然農」の分かりやすさ、シンプルさが多くの人に受け入れられ、各地で自然農塾が開催されている。2008年(株)自然食通信社から出版された新井由巳著「自然農に生きる人たち」によると、25都道府県に約30の自然農塾がある(図1)。

全国に約30カ所ある自然農塾のうち、自然農関係の書物によく紹介される自然農のメッカとも言える赤目塾の概要は以下の通りだ。

*赤目自然農塾

自然農の実践者が多い地域は川口の住む奈良市周辺のようなのだが、その中でも農塾第一号で規模も最大であり、しかも川口自身が定期的に指導に訪れる農塾として、全国から塾生が集まるのが赤目農塾だ。

赤目農塾は奈良県と三重県の県境にあり、長年耕作放棄地となっていた棚田が舞台になっている。1991年に始まり、当初7反の水田に年間40人程がそれぞれ自主的に研修していたが、最終的には農地も2町7反に増え、今では年間200人程が無料で研修に参加するという。しかし、この研修はあくまでも自主研修で、無料で寝泊まりできる農小屋があるが、管理人もおらず、正確な研修生の実態把握はできていない。

(2) 福岡自然農塾

福岡市から唐津へ、西九州自動車道の最終インターを出てJR加布里駅の近く、糸島市二丈町の松尾ほのほの農園を中心に、福岡自然農塾は20年の活動を続けている。福岡自然農塾の学びの場としては、次の5カ所の農園が用意されている。

注

機械・として使われているのは、足ふみ脱穀機、草刈機など。

肥料も生活の中から出たコメヌカ、油かす、野菜くず、もみがらなどは「補い」として置き肥料として使う。

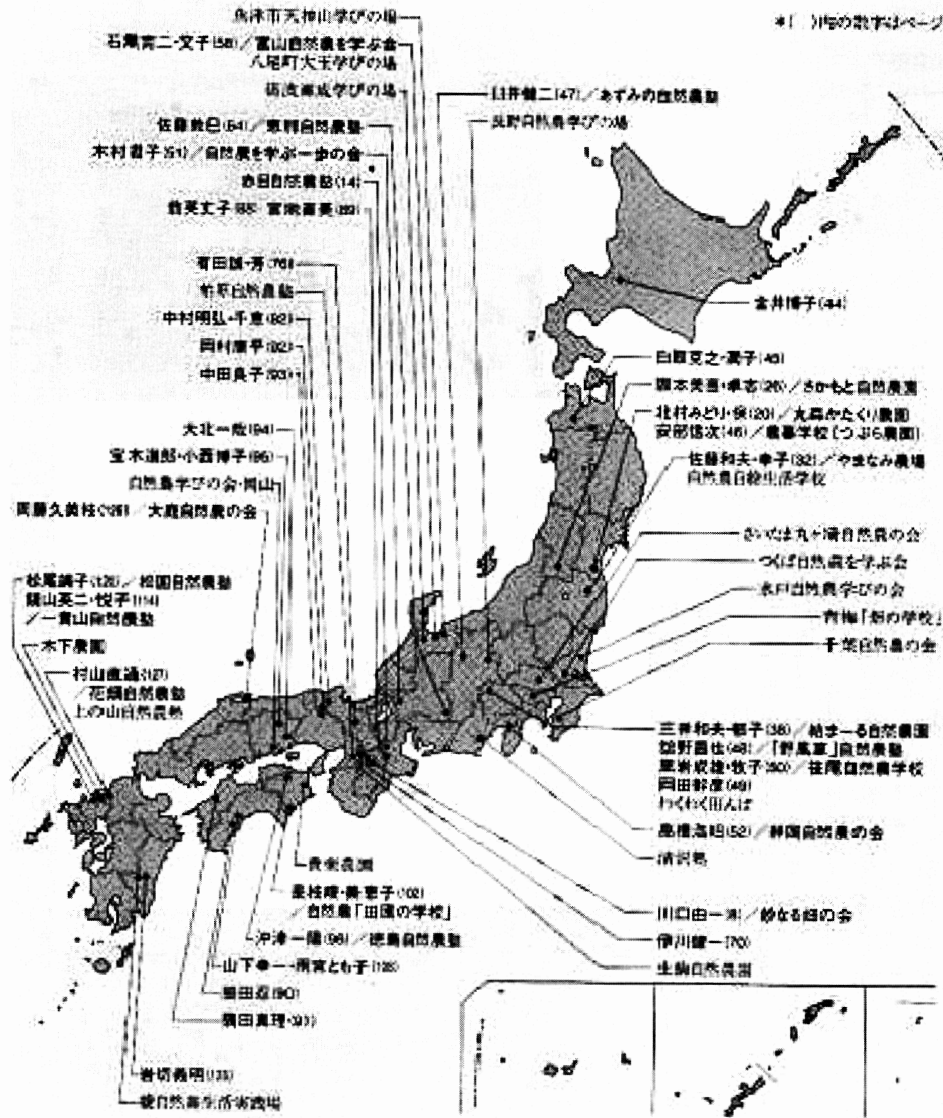


図1. 自然農塾の日本地図 (2008年自然食通信社「自然農に生きる人たち」より)

*** 松尾ほのぼの農園**

有機農法6年の後、自然農に切りかえて20年目。100アールの畑を営み、2010年度は、自然農で営農を目指す5名の研修生を受け入れている。

農園主の松尾靖子が福岡自然農塾の代表を務める。

*** 鏡山農園**

山寺のある一貴山の中腹の山間地の棚田で自給自足の家庭菜園。

*** 木下農園**

糸島半島の海辺の集落で自給自足の家庭菜園。

*** 村山農園**

福岡市の住宅地の中の8アールの家庭菜園。

*** 上の山農園**

里山のミカン畑の傾斜地の独身男性のミニ菜園。

この5つの農園が一丸となって福岡自然農塾を運営しており、活発な活動ぶりで全国的に有名になっている。なお、自然農を体験したい人たちのために、松尾ほのぼの農園の

敷地内に田んぼ20アール、畑30アールの農地が開放され、約50人が一区画10坪ほどの広さで年間を通じて学んでいる。(ここは松国自然農学びの場と呼ばれる。)

また、一貴山中腹の鏡山農園の近くの40アールの田畑で現在5家族と4人が自然農を実践しながら学んでいる。(ここは一貴山自然農学びの場と呼ばれる。)

1) 福岡自然農塾20年の取り組み

福岡自然農塾は2011年でちょうど発足20年を迎える。簡単に歩みをまとめてみる。

- 1990年 松尾靖子、奈良県の川口由一のもとに、2か月に一度のわりで通って一年間自然農を学ぶ。
- 1992年 唐原で自然農塾を始める。最初は2名から始まったが、2年間の間で約60名になり、川口由一を招いて年2回の勉強会をスタートさせる。
- 1994年 地主より土地の返還を求められ、唐原を引き上げる。
- 1995年 松国の田んぼ約5アールで自然農での米づくり

を始める。

- 2002年 17アールの田んぼと畑2.5アールを学びの場として松尾家が提供。約40名の参加者。
- 2003年 米作りの学びの場として12アールの田んぼが増える。
- 2005年 14年にわたりおこなってきた川口由一を招いての勉強会（年2回）が終了し、その後はもっときめ細かい学びの機会が必要との要望で年5～6回の勉強会を開くことになり、現在に至る。

2) 福岡自然農塾の年間スケジュール

年5～6回の学びの会が年ごとに充実してきて、参加者は常時100名を越え、ほとんどが30代の若者が占める。塾の1年はほぼ以下のようなスケジュールになっている。

参加料は各回一人500円

- 2月 冬の 仕事（稲の苗床の準備、畑の畝立ての仕方）
- 4月 春の 仕事（モミの種降ろし、麦刈、春夏野菜の種下ろし）
- 5月 特別テーマ企画「私を生きる」
- 6月 田植えの実習
- 7月 特別テーマ企画「自然農を生業とする、その心」
- 8月 夏の 仕事（田の草の処しかた、秋冬野菜の種降ろし）
- 10月 秋の 仕事（稲刈り、架け干しの仕方、麦の種降ろし）
- 11月 実りを手にする（米の脱穀、唐箕、籾すりの仕方）
- 1月 特別テーマ企画「自然農の世界・その深きところを訪ねる」

映像を通して、川口さんの田畑の様子と話から自然農を学ぶ

(3) 鹿児島市吉田町福崎農園

鹿児島市吉田町と始良市蒲生町との町境の昔ながらの農村地帯に福崎農園がある。農園主の福崎貴之氏はエンジニアとしての会社勤めを退職後、実家の農園を継ぎ、最初は有機農業で20アールの水田と約20アールの畑を耕していたが「土づくり」にすっかり疲れ、止めてしまった。次に、MOA自然農法に切り替えたが、何かしっくりこなくて、いろいろ模索しているうちに川口由一の自然農の本に出会った。その後、福岡自然農塾に何回か学び、約10年前に全ての田畑を自然農に切り替えた。そのうち、人づてに自然農



写真1. 室内での研修



写真2. 稲の成長を観察する参加者 2013年10月

を志す人たちが訪ねてくるようになり、6年ほど前から年に6回くらいの研修会を開くようになった。ほとんどは、自然農で自給自足を目指す若い人が中心だが、この研修会が楽しみだと、遠く出水市から参加する70代の男性の常連がいる。ここ2年で、福島原発事故の放射能を逃れて鹿児島に移住した若い人たちの参加が増えている。そういう人たちにとっても、この研修会は交流の場ともなっている。

田んぼでは、ヒノヒカリや黒米、緑米、かおり米、その他の珍しい米に混じってひととき実のつき方の良い、「ハッピーヒル米」が目立っている。福岡正信氏から直接分けてもらった種モミで、福岡の英語訳で「ハッピーヒル」と名づけられた米だという。

5. 自然農による農的生活の実情

(1) 全国の自然農塾に対してのアンケート調査

福岡自然農塾の年間スケジュールの中、7月の特別テーマ企画として、「自然農を生業とする、その心」と題打っており、具体的に自然農の技術を福岡自然農塾で学んだ4人の若者が事例報告をした。（うち一人は現在勤めを続けながら自営農家を目ざして準備中）

本当に自然農で生業としての営農は可能なのか？たまたま、今現在、勢いのある福岡自然農塾だけの現象なのではないのか？そんな疑問を感じて、全国の自然農塾にアンケート調査を実施した。

アンケート実施日	2011年1月3日
アンケート発送数	33通
アンケート回収数	29通

設問は合計10問で、主に研修生受け入れに関して8問、9問目は周りの地主との折り合いのつけ方、10問目は経営上の悩みについて答えてもらった。

アンケート設問

- 問1 これまで研修生を受け入れたことがありますか。
- 問2 はいと答えた方、今までに研修生の総数は何人になりますか。
- 問3 その中で現在生業として就農している人は何人ですか。
- 問4 いったん就農したものの軌道に乗れず、自然農で

の生業をあきらめた人は何人ですか。

問5 上記のあきらめざるをえなかった理由は何だったと思いますか。箇条書きで3つ書いてください。

問6 研修生を受け入れて何年になりますか。

問7 研修生に賃金を払っていますか。

問8 上記ではいと答えた方, 現在その賃金は月額いくらでしょうか。

問9 自然農で作物を栽培する場合, 周りの地主たちとの折り合いはどのようにつけていますか。

問10 自然農での生業であなたの経営上の悩みはどんなことですか。いくつでも書いてください。

③鳥獣害が痛手

④手作業なので忙しくて事務処理の時間が取れない

以上のアンケートの調査から次のことが言える。

まず, 自然農塾として本に紹介されている農園であっても, 研修生の受け入れが29農園中13農園と予想よりはるかに少なかった。受け入れ農家でも, 自給自足を目指す研修生は歓迎するが, 生業を旨とする研修生は, その人の人生をも引き受けることになりそうで, 心理的に大変だった, もう研修生の受け入れは止めているというところもあった。

また, アンケートの問10の答えでは20年近く自然農で頑張ってきたが, 年を取って, もう営農をあきらめかけている。特に米作りは一本いっぼんの苗を手作業でスコップで植えていくので体力的にも限界だ, という答えがあった。また, 経営的に苦しく

アンケート回収結果 29農園回答あり

問1 これまで研修生を受け入れたことがありますか。
はい (13農園) いいえ (16農園)

問1で, はいと答えた13農園について問2, 問3, 問4, 問6, 問7・8の答えを表にまとめる(表1)。

生業としてはやっていけず, 副業(早朝の新聞配達や塾の講師など)で現金収入を得て, 何とかやっているという答えも数件あった。中には, 最初から生業としてではなく, あくまでも自給的農家としてその暮らしぶりを研修してもらっているという農家もあった。

研修生にしても, そういう農家で研修するうちに, 農家の窮状が分かってくるのか, 研修生の人数の割には, 生業として就農する人は少ない。またいったん就農してもあきらめる人も割合としては多い。

(2) 福岡自然農塾修了生3人の調査

福岡自然農塾では, 常時4人から6人ほどが通常1年間の研修課程で学んでいる。塾が位置する糸島市二丈町は博多まで高速道路で30分, 昔ながらの田園地帯の丘陵地にはベッドタウンが造成され, 数年前に九州大学のキャンパスが移転されるなどして, 福岡でも活気を帯びてきている地域だ。気候も温暖で, 南に背振山系を控え, 水も豊かで農的生活を送るには最適な場所だ。研修を終えた若い人たちは, 好んでこのあたりに住み着き, 自然農のネットワークで結ばれて, ある種のコミュニティーを形成している。そんな中の3人を調査した。3人の概要は以下の通りだ。

* K農園

販売用の加工品として, 夏場のきゅうりとオクラをピクルスにし, 自宅でびん詰めにして年間約400本を製造している。1本400円の値段で, 主に物産館, 野菜を納入するレストランに販売している。(このピクルス用の野菜は全収穫の約30パーセントを材料としている。)ピクルス用とレストラン向けに, ハーブも数種類栽培している。収穫の

問5 自然農での生業をあきらめざるをえなかった理由

①収入が少なく生業としては無理

②自然農の技術が不足

③地主とのトラブル, 農地が借りられない

④農産物の販売先がない

⑤覚悟が足りない

⑥育児・親の介護

問9 周りの地主たちとの折り合い

①特にトラブルはない

②謙虚にふるまう

③隣接するところは, まめに草刈りし, 種がとばないように早めに草を刈る

④地域の役は進んで引き受ける

⑤米作りの場合, 用水路の開閉が慣行農業と時期が異なるので自家用ポンプで取水

⑥笑顔で挨拶する

⑦自然農の栽培方法をきちんと説明して理解してもらう

問10 経営上の悩み

①生業として経済的に厳しい

②作物ができない, 収穫が少なく出荷できない

自然農だけでは経営がなりたらず, 米は有機農法で機械を使って作っている。

表1. 研修生受入れ状況

設問	農園	福島市 S	北杜市 U	糸島市 M	岐阜県 K	綾町 K	茨城県 M	松山市 S	長野県 M	徳島県 K	山梨県 O	大阪府 Y	山形県 S	無記名
問2 研修者の総数		75	15	30	1	50	1	200	5	25	50	200	10	2
問3 現在の就農者数		4	4	15	0	2	1	2	2	0	0	6	0	0
問4 生業からの離農者数		0	0	5	0	N	0	10	1	0	0	0	0	0
問6 受け入れ年数		15	12	15	14	11	-	15	6	7	5	16	-	3
問7 研修者への賃金		×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×
問8 賃金の月額		-	-	-	-	-	-	7万円	-	-	-	-	-	-

表2. 福岡自然農塾修了生3農園の概要

	K農園	Y農園	S農園
年齢	39	33	32
営農年数	3	0.5	4
家族構成	妻	独身	独身
以前の職業	食品メーカー勤務	整骨院補助	なし
農地の面積	30aうち借地30a	10aうち借地10a	10aうち借地10a
年間借地料	25000円	0円	0円
副業	食のイベント開催	なし	調理員
伴侶の副業	洋裁		
野菜ボックス宅配件数	なし	なし	1件
野菜ボックス料金	なし	なし	1500円
加工品(販売用)	ピクルス	なし	みそ
作物のその他の販路	レストラン, 直売所	直売所, 食堂	自然食品店
農業所得の年額	0円	0円	0円

半分はレストランへ納入し、残った野菜は近くの物産館に出す。

自分の副業として、食に関してのイベントを主催し、インターネットで宣伝している。しかし、農業所得はすべての経費を入れて計算するとほぼゼロになる。生活は事実上、妻の服作りの収入で何とか暮らしている。妻は自然素材の綿、麻を使ったこだわりの服を一点一点手作りし、インターネット <http://bucolica.web.fc2.com/framepage1.html> で販売する。たまに、K農園の野菜と自分の服をコラボレーションさせた展示即売会を知り合いの小さな店の店先で開かせてもらう。経済的なゆとりはないが、心は豊かで今の生活の悩みは特にない。



写真3. K農園(服と野菜のコラボ展)

*Y農場

まだ営農を始めて半年の独身女性で実家に暮らしている。顧客もなく副業もないので、今までの貯金を少しずつ崩してやっているが、たまに親からお金を借りることもあって苦しい。農業所得はガソリン代まで経費として入れるとゼロに近い。今の悩みとしては、顧客の獲得が大変なことと、田畑の面積をもっと広げたいが、体力的に無理かもしれないと思う。自分から始めたことだし、畑にいと気持がいいのでこの仕事は好きだ。

*S農園

営農を始めて4年になる独身女性。自給用にミニサイズの田んぼでコメも作っている。宅配は一軒、1セット1500円の野菜ボックスを週一回届ける。あと自然食品店と地域の物産館に出す。加工品として、手作りの味噌を1キロ600円で知り合いに買ってもらうが、量は少ない。自家用に作るついでに多めに作って分けてあげるとい程度だ。

副業は保育園の調理師だ。一日6時間のパート勤務だが、残業が多く、ほとんど8時間勤務しているようなもので、畑に立つ時間が少ない。現在の悩みとしては、いま家賃が月額2万円の倉庫に住んでいるが、風呂がないのが不便だ。もっといいところに住みたいが、野菜の保存や仕分けをするためにはアパートや市営住宅には住めない、ここで頑張るしかない。農業所得は計算したことはない。もともと農業だけではやっていけないと分かっていて、「半農半X」でいくために自然農を学んだ。計算をすること自体が自然農の心に反することだ。

糸島市の松尾農園に近いところで、生業として営農をスタートさせた3つの農園の調査は以上の結果だった。一番聞きかかった農業所得は3人もゼロと答えた。

(3) 鹿児島市周辺の2人の事例

*Hさんの事例

年令27歳、家族は妻と生後6ヶ月の娘、専業農家2年目
Hさんは高校卒業後、福岡県の大学の農学部で学び、大学院時代に交換留学生としてドイツの大学で有機農法を1年間学び帰国。卒業後、父親の有機農場でしばらく働いた後、福岡自然農塾の松尾農園の研修生として1年間の研修を終えて鹿児島市川上町の実家に戻った。実家は代々の農家で、父親は鹿児島の有機農業の先駆者としても有名な人だが、敢えて父親とは違う農法で2年前に独立した。現在60アールの畑を借りて自然農による営農を始めた。借地料は年間1万円の安さだが、自然農で作付けするにはまだ土壌が整わず、収穫量は少ない。野菜の宅配を3軒始めたが、野菜の数量が足りずに、たまに有機農法の野菜を混ぜることがあるが、その旨お便りに書いて、消費者には理解してもらっている。また、夏場の端境期には野菜の収穫がほとんど見込めないの、宅配はストップしてしまうが、これ

も消費者には正直に話して納得してもらっている。宅配は宅急便の業者に委託し、夏場はクール便にする。また、自然食レストランにも野菜を納めている。インターネットで農場の様子や野菜の宣伝、イベントの案内を配信している。自然農での農業だけの収入は月に3万円ほどだが、自然農での農業は楽しく、無限の可能性を感じるので今の生活には満足している。就農支援金を年額150万円受けていて、それで生活はなりたっているが、月に5万円の家賃が負担に感じる。

いま、新しい取り組みとして体験農園を始めた。これは、自然農で野菜を栽培したい家族に農地を提供し、種や農業用具を用意し、栽培技術を丁寧に指導し、野菜づくりの楽しさを体験して欲しいと願って始めた。具体的には、一区画10坪を種代と自然農法指導料込みの年額4万円で貸し、現在35家族が参加している。この体験農園からの収入が、年間100万円ほどある。

将来は、加工品の販売や農家カフェを目指しているが、自然農を単なるアグリビジネスの枠で捉えずに、その特徴を生かした暮らし全体のモデルを作りたいと思っている。

* Uさんの事例

年齢32歳，家族は夫と3歳の息子，自然農3年目

かつて、Uさん一家は神奈川県に住んでいて夫は会社員。6年前に自然農を知り、川口由一さんの本を読んで、小さな家庭菜園で実践していた。しかし、東日本大震災による福島原発事故の放射能もれの被害を避けるため、震災3日後に車で夫の祖父の家がある鹿児島市近郊のI市にたどり着いた。

夫は会社を辞め、以前から憧れていた農的暮らしを始めることにした。祖父が亡くなってからずっと空き家だった古民家に落ち着いたが、周りは山間地の限界集落。農地は50アールをほとんどただで借りることができたが、長期間耕作放棄地だったので、農地が整うまで大変だった。水田を借りて米も自給したいが、子どもが小さくてまだ手がかかるので、今は無理だと思う。夫は新しい職を探しにハローワークに行ったが、なかなか条件に合う職は見つからない。また、市の就農支援の窓口相談に行ったが、話がかみ合わずにあきらめた。

夫は自然農の野菜を鹿児島市内の友達数人に自分の車で宅配しているが、コスト計算してみるととても引き合わない。Uさんはオーガニックコットンを使った服や自家製のジャム、たけのこの水煮のビン詰めをイベントなどで売って現金収入を得ている。しかし、それだけではとても生活できないので、夫は養鶏場で働き、農繁期には農業法人で農薬散布や草払いなどの仕事をして現金を得ている。自然農を志して農的生活を始めたのに、農薬をまいたり、草を払ったりの仕事で生活の糧を得る現状に、切ない矛盾を感じている。現在の収入は2人合わせて一月に10万から15万円くらい。来年春に第2子の出産を控えて、経済的にとても不安。

将来はカフェ兼ギャラリーの店を開いて、農的生活の情報発信や情報交換の場所を提供したい。自分自身の生活も余計なものをそぎ落として、もっとシンプルに生きていきたい。

6. 考 察

かつて農業は肉体労働の最たるもの、労が多い割には経済的には報われない仕事と思われ、農業人口はどんどん下降線をたどった。農村はすっかり過疎化、高齢化が進み、「限界集落」現象があらわになっている。今や人口の8割が都市部に住み、残りの2割が農村に、しかしそれも高齢者が多く、農業人口の平均年齢は65歳といわれる。こうした農村に、定年帰農者が増えるのは大いに喜ばしいことだ。また定年帰農者にしても、長い老後を自給自足しながら健やかに人生を全うできることだろう。また、若い人たちが農業に関心を持ち、自然に囲まれた、スローライフ、ナチュラルライフの農的暮らしを目指す動きも頼もしく喜ばしい。

しかし、現実には厳しく農業では食べていけない現状がある。自治体でも就農支援の施策を打ち出してはいるが、よりきめ細かい支援が必要だろう。また、「半農半X」という新しい概念で若い人たちが半農の小さな農で自給自足しながら、半Xで社会貢献をしながら自らの人生を充実させていく生き方は「共生の世紀」と言われる21世紀の生き方として大いに共感できるし、これからの農業に小さな希望が見えた。

本論文では、小さな農をめざす人たちの中で、静かな広がりを見せている自然農法を調べた。いろいろな農法がたくさんあって、それらをどのように系統だてて分類するか迷ったが、第1に岡田茂吉の「MOA自然農法」を、第2に福岡正信の自然農法と、それをより実践的に普及する川口由一の「自然農」、第3にその他のもろもろの自然農法をまとめて、結果的に3つに分類した。

まずMOA自然農法の組織力は、世界救世教という宗教団体の磐石な組織が支えているので、強力なネットワークが全国に張り巡らされている。生産者と消費者はそのネットワークでしっかり結び付けられていて、生産者は販路の心配をすることなく作付ができるだろう。

またMOA自然農法は具体的にどのような農法なのか、MOAガイドラインで調べた。結論から言えば、有機農法とはほぼ同じ農法だと思った。まず深耕はしないが機械を使っただけで浅耕している。肥料は化学的なものは絶対に避けるが、完熟した家畜排せつ物は使用している。草はビニールマルチで防ぐのも良しとしていて（近頃の書物では草生栽培も勧めている）、ほとんど有機農法と同じだと思った。

環境保全型農業の推進にはMOAは組織をあげて熱心に取り組んでいて、鹿児島においても環境保全型農業研修会を15年続けて盛大に開催している。また食育にも熱心で、そのためのセミナーもよく開催している。子どもにも農業体験をさせるためにも家庭菜園を奨励していて、それが農業および自然に対する理解を深め、健全な家庭と地域づくりに寄与することだと謳っていて、とても心丈夫に感じた。

福岡正信とそれに続く川口由一の自然農は、鎌一本から始められる農法で、ローコストでシンプルな農法だと思う。耕さず、肥料も用いず、草も抜かず、農薬もいらない農業、「持ち込まず、持ち出さない」をモットーに、ひたすら田

畑の上で命を循環させる農法だ。具体的には、生えてきた草を適時に刈って敷くだけなので、老若男女どの人にもやれる農法だと思う。ただ、収穫の量でみると厳しいものがある。例えば福岡自然農塾の鏡山農園の7アールの田んぼの収穫量は120キロのモミ、(精米にすると90キロほど)これは慣行農法の半分以下の量だ。しかも、自然農でコメ作りする場合、育てた苗を一本一本手作業で半乾田に移植ゴテを使って植えるというもので、田植えは重労働になる。実践者の中にも、コメは自給用だけ作るという人が多い。有名な松尾農園でもコメは夫が有機栽培で作っている。

コメ作りでは大変でも、野菜に関しては特に家庭菜園、市民農園をはじめ、小さな農を営むには最適な方法だと思う。まず、ほとんどコストがかからない。道具も鎌だけ、もし最初に畝をつくるなら、鋤が一本あればその後も何かと便利かもしれない。できた作物は安全そのものだし、自産自消で作って楽しく、食べてうれしい週末農業で、家計にも直接の恩恵がある。経済的にも厳しさが増す昨今、家庭菜園、市民農園などや自給自足の小さな農は、そういう意味でもこれからはますます大きな広がりを見せていくことだろう。

また本論文では、九州地方で自然農塾の活動をしていて、全国でも有名な福岡自然農塾の活発な活動と、20年にわたる歴史を調べた。福岡自然農塾の20年の歴史は松尾靖子さんの存在の賜物だろう。農園の農地の提供、研修生の受け入れ、農塾の代表として、そうして何よりも営農家として、毎週40箱の野菜ボックスを切らすことなく発送するのは大変な仕事だ。常時60種類の野菜栽培を目安にしていると聞いた。松尾靖子さんは名実ともに、福岡自然農塾の中心人物だったとつくづく思う。(残念なことに、松尾さんは昨年病死された。現在、松尾農園は研修生たちが引き継いでいる。)

さらに、鹿児島においても、数年前から福岡農園に自然農で自給自足を目指す若い人たちが学んでいる事を知り、うれしく思った。鹿児島は、年間を通じて温暖な気候に恵まれ、栽培できる野菜の種類も多く、自然農を実践するには最適な所だ。都市部での生活に見切りを付けて、スローライフ、ナチュラルライフを目指す若者が定住すれば、農村の活性化につながり、限界集落の解消への可能性も見えてくる。

しかしながら、厳しい現実に少なからずショックを受けた。生業として、販売農家としての自然農の農家経営の現実には予想以上に厳しいものがあつた。

まず、福岡自然農塾のような農塾が全国に33農園が紹介されているのを知り、研修生の受け入れ状況のアンケート調査を行った。ほとんどが自然農関係の本によく名前が出てくる農園で、さぞかし・と期待していたが、予想とは違う結果にたじろいでしまった。

福岡自然農塾で知り合ったKさん、Yさん、Sさんにアンケートをお願いし、その後詳しく電話で聞き取り調査した時も驚いた。3人が3人とも農業所得はゼロと答えたからだ。また、鹿児島において、対象的な2つの農園の調査から、自然農の持つ限界とそれゆえの可能性が見えてきた。つまり、U農園に見るように、収穫量が少なく、見栄えの

悪い不ぞろいの自然農の農産物が一般の市場に出荷できる可能性は低く、販路の確保が困難なこと、よしんば、直売の顧客が獲得できたとしても、自分で宅配するとなると、ガソリン代にも満たない収入にしかならず、生活は行き詰ってしまう。このように、自然農自体は「安心・安全」で、農地にとっては持続可能な農法であっても、それを生業とする人たちの生活自体はなかなか持続可能にはなりえない現実がある。

しかし一方、H農園にみるように、その自然農の安心・安全、シンプルさ、ローコストの魅力をインターネットで発信し、体験農場として都市部に住む農を志す人たちに農地を提供し、自然農を指導し広く普及するというアグリビジネスに、これからの可能性と方向性を感じた。Hさんは、ドイツの有機農業を1年間学び、帰国後さらに福岡自然農塾の松尾農園でも1年の研修を積んでいる。現在27歳という若さでの自然農によるアグリビジネスの今後に、熱い期待をもって注目し続けたい。

最後に、本論文で明らかにできたのは、自然農による生業としての営農(販売農家のうち特に主業農家として)の厳しさだった。全国で自然農塾で有名な農家自体の経営も厳しいものがあり、心が痛んだ。しかし、自然農は今や静かな広がりを見せ、特に若者が自然農塾に目立つようになってきた。あと10年もしたら自然農が大きくなうねりになるかもしれない。そのうねりを期待しながら、また福岡自然農塾の20年以上に及ぶ地道な活動に敬意を表して、またアンケートに快く協力してくださった全国の自然農の農家の皆さんに心から感謝しながら本論文を終わる。

参 考 文 献

- [1] 福岡正信「自然農法」時事通信社 1976年
- [2] 福岡正信「自然農法 わら一本の革命」1983年
- [3] 川口由一「妙なる畑に立ちて」野草社 1990年
- [4] 川口由一編「自然農への道」創森社 2005年
- [5] 新井由己「自然農に生きる人たち」自然食通信社 2008年
- [6] 岩澤信夫「不耕起でよみがえる」創森社 2003年
- [7] MOA「科学する食育」(株)エムオーエー商事 2008年
- [8] MOA「MOA自然農法ガイドライン」エムオーエー自然農法文化事業団 2007年
- [9] 宇田川武俊「自然農法への転換技術」農山漁村文化協会 1998年
- [10] 鏡山悦子「自然農・栽培の手引き」南方新社 2007年
- [11] 農文協「現代農業」2010年8月号 農山漁村文化協会 2010年
- [12] 鳥山敏子・川口由一「自然農」晩成書房 2000年
- [13] 木嶋利男「家庭菜園の化学」講談社 2009年
- [14] 木村秋則「リングが教えてくれたこと」日本経済新聞出版社 2009年
- [15] ツルネン・マルティ「自然に従う生き方と農法ルオム」戎光祥出版(株) 2009年
- [16] 萬田正治「生活農業の時代」南方新社 2010年
- [17] 高坂勝「減速して生きる ダウンシフターズ」幻冬社 2010年
- [18] 趙漢珪「はじめよう！自然農業」創森社 2010年
- [19] 山崎農業研究所「自給再考」農山漁村文化研究所 2008年
- [20] 塩見直紀「半農半Xな人生の歩き方」遊タイム出版 2007年
- [21] 清木たくや「田舎でスローライフを極める」学芸出版社 2007年
- [22] 篠谷浩介 NHK広島取材班「里山資本主義」角川書店 2013年
- [23] ジュールス プレティ「百姓仕事で世界は変わる」築地書館 2006年
- [24] 福岡正信「緑の哲学」春秋社 2013年

The Limit and Direction of Natural Farming

Hiroko OBARA and Kunihiro AKIYAMA[†]

(*Laboratory of Farm Management*)

Summary

Present Japanese agriculture faces a historical turning point; its association with TPP and the problematic WHO. Conclusions of these treaties will result in a tremendous increase in imported agricultural products into the Japanese market. One of the more significant problems encountered in the import of agricultural products revolves around the issues of food safety. In these situations, consumers have constructed their own small farms by renting unused fields or renting small public farms, and have started to produce their own agricultural products utilizing safe methods.

In this report, we investigated the functional groups of “Shizen-Nou” (Natural Farming) along with agricultural methods utilizing the natural processes proposed by Yoshikazu Kawaguchi. In addition, we then identified some of the problems of Shizen-Nou followed by a discussion of the future of fruitful agricultural life styles.

Key words: Small farming, Natural Farming, Life styles that cater for enjoyable farming, Agricultural life styles that generate a partial income for X.

[†]: Correspondence to: Kunihiro AKIYAMA (Laboratory of Farm Management)

Tel: 099-285-8623, E-mail: akiyama@agri.kagoshima-u.ac.jp